春 '24 季刊誌 Beyond Theatre 神奈川芸術劇場

KAAT PAPER

特別対談 横浜美術館×KAAT

REVIEW／神奈川へ、会いにく（一般社団法人横浜みなとみらい21）／ただいま、KAAT準備中／公演スケジュール

対談

横浜美術館 館長
蔵屋美香 × 長塚圭史
KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督

「想像力が交差するひらかれた場所を目指して」

「第8回横浜トリエンナーレ」の開幕に合わせて、大規模改修工事を経て約3年ぶりにオープンした横浜美術館※。グランドギャラリーには、ガラス張りの天井から光が降り注ぐなど、空間の印象も一新されています。同じ横浜に所在する代表的文化施設であり、KAAT神奈川芸術劇場が目指す「社会にひらかれた劇場」という考えに共通性を感じ、芸術監督の長塚圭史が、蔵屋美香館長と「ひらかれた文化施設とは何か？」を語り合いました。

※トリエンナーレ閉幕後、再度休館し、2025年2月の全館オープンに向けて、順次オープン予定。

文＝三浦真紀　写真＝木川宗一郎

横浜市民の思いのなかにある美術館

── 蔵屋さん、美術館の館長とはどんなお仕事ですか。

蔵屋　英語で言うとディレクター、つまり館の方針を大きくディレクションする人です。元々は学芸員として、長年、美術を研究し、作品を収集・保管して展示するという仕事をしてきました。館長になると財政状況や人事を含め、美術館全体の運営を見ることになります。もちろん展覧会も開催しますし、図書室などの施設の運営もあります。また、お子さんや市民の創作活動をサポートしたり、作品について理解を深めていただいたりする教育普及事業もあります。

長塚　それまでやっていらした学芸員と館長とでは、仕事の内容は違うものですか。

蔵屋　それほど違いはないなという実感です。美術を一般の方たちにどのように楽しんでいただくかが課題なのは同じ。また館の主な収入は展覧会のチケット販売によるもので、学芸員は展覧会の収支も厳しく見なければいけませんが、そこも一緒です。

長塚　僕は芸術監督、つまりアーティスティック・ディレクターで、財政や人事には関わっていません。劇場の方針を決めて、上演するプログラムを選定して提案。それを劇場内で調整して決めていきます。蔵屋さんは東京国立近代美術館と横浜美術館に役割の違いを感じますか。

蔵屋　業務内容自体は実はどの美術館もそれほど変わりません。一番の違いは国立ではなくて市立ということです。正確には市が当財団に運営を委託しているのですが、国立は予算規模が大きく、幅広く「国民」に向けて展覧会を開催します。でも、国民という集団が大きすぎて、どういう人たちなのかが見えにくいところもあった。また、地元のファンというものがいないので、日本画の展覧会をやれば年齢層高め、現代芸術なら若めと、継続して来てくれる常連さんがいる感じではないんです。その点、横浜美術館は35年前にオープンし、幼稚園や小学生の頃にここで展覧会を観て美術の道に進んだという人もたくさんいます。しかも「市民」は「国民」よりはるかに小さい集団なので、ニーズや特性がわかりやすいんです。もちろんこの美術館は市民だけでなく、多くのお客さまが東京や横浜以外からいらっしゃいます。それでも具体的に顔の見える人のためにやっているということが、これだけ精神に安定をもたらすのだと初めて知りました。ここにきて非常によかったと思うことの一つです。

長塚　面白いですね。美術館前に広がる「美術の広場」に星が照射されていたと、散歩がてらによく訪れていたという方から聞いたことがあります。好きな場所だとおっしゃっていました。

蔵屋　それはうれしいです。30周年の時に横浜美術館の思い出の募集をしたら、昔、デートで来たとか（笑）、それぞれの思い出がたくさん集まりました。必ずしも美術の大ファンではなくても、観光やお散歩のスポットとして、皆さんに愛されていることがよくわかりました。

長塚　入り口の広々としたホール、とても気持ちがいいですね。入場料はおいくらですか。

ひらかれた美術館・劇場とは何なのか？

蔵屋　グランドギャラリーですね。じつはあそこは無料ゾーンなんです。

長塚　おお、それはいい！

蔵屋　これだけ大規模で、作品の展示もしていて、無料で入れるゾーンのある美術館は全国にそんなにありません。そこから上がったフロアのギャラリー（展示室）から初めて有料ゾーンになります。あの大きな空間は、じつは先ほどおっしゃった美術館前の広場と連続するように設計されているんです。つまり広場の延長として人が入ってきて、何となく座ったり、ぼんやりしたり、人とお喋りしたりする場所として使えるようにとつくられているんです。

長塚　休館前は大勢の人が利用していた？

蔵屋　それが、建物に入った途端にお金がかかると思う人が多いようで、ものすごくにぎわっていたわけではないんです。今回の改修は元々古くなった空調の改修が主目的でしたが、この大きな空間は無料でのんびりできる、楽しいところですよ！と可視化する、そんな一大プロジェクトとしての性格を途中からもちはじめました。

長塚　素敵ですね。具体的にはどう変わりますか。

蔵屋　グランドギャラリーは御影石を使用していて、天井はガラス張り。広々とした素晴らしい空間ですが、ちょっと寒々しさもありました。今回、天井のルーバーを修理して、こもれびのように光が落ちてくる、外の天候と一体化した雰囲気を取り戻しました。さらに、椅子とテーブルをたくさん置いて、いつでも誰でも寛げる空間にする予定です。私は椅子がとても好きなんです。椅子って魔法のツールで、置くだけで「そこはいていい場所ですよ」というメッセージにもなるんです。建築家の乾久美子さんと、アートディレクターの菊地敦己さんにお願いして、建物に使われている御影石から抽出したピンク色を基調としたやわらかく親しみやすい家具をたくさん入れてもらう予定です。

長塚　わぁ、いいですね。僕も椅子が好きなんです。カフェもありますか？

蔵屋　あります。カフェはより素敵になって、ミュージアムショップも一新。日常使いをしていただける場所になると思います。美術の広場って幼稚園や保育園の子どもたちがお散歩で大勢来るんですよ。そういう人たちの誰もが気軽に入れるようになるとうれしいです。グランドギャラリーには彫刻作品も展示するので、日常に近いのに作品の隣で和める、美術館ならではの特別な場所にしたいと思っています。KAATの大きなアトリウムも同じような空間ですよね？

長塚　KAATの建物は全面ガラス張りになっていて、当初は中と外をつなぐ通り道のようなコンセプトでした。だけど、昼間はガラスがまわりの風景を取り込んでしまい、外から中の様子がつかみにくい。夜は外から中が見えて最高なんですけどね。あのアトリウムに特設劇場をつくってお芝居をしたこともあります（2021年の『「王将」-三部作-』）。

蔵屋　課題は同じですね。いい場所にある大空間をどうにぎわせるか。私、

KAATのアトリウム、好きですよ。近所に美術館が属する財団の事務局があるので、時間があるとよく階段のところのソファーに座っています(笑)。

長塚　僕はロンドンのデザイン・ミュージアムみたいに、階段に人が座っていたり、KAATの玄関口を誰でも自由に使える開けた場所にしたいんですよ。

蔵屋　よくわかります。私は学芸員時代から、美術館で展覧会を観るだけでなく、半日くらいを過ごしていただいて、「今日はいい日だった」と思ってほしい、そんな気持ちで企画してきたんですよ。長塚さんも演劇だけでなく、劇場がにぎわうにはどうしたらいいか、ということを考えていらっしゃるんですね。

長塚　お芝居を観るってなかなかハードルの高いことですから。いつでも気軽に和める空間があって、そこにいるとこれから観劇しようと楽しみにしてくる人、また観劇後に熱気をもって下りてくる人々がいる。それを見て、何があるのかな?と思ってもらえたら。そのためにはアトリウムや外からのアプローチで惹きつけなければならない。いずれは街に溶け込んだ劇場になるために、あれこれ試行錯誤しています。

――蔵屋さんも長塚さんも就任なさってすぐ、コロナ禍が始まりました。

長塚　美術館にとってコロナ禍はどういう影響がありましたか。

蔵屋　本物を見ていただくことを前提にした場所で、それができないのは初めての経験でした。でも、よい点もありました。オンラインでの展開です。これまで必要だとわかっていてもやり切れていなかったことが、すごい勢いで進みました。一方で、作品の画像はインターネットでたくさん見られるようになったものの、それがどのくらいの大きさなのかは伝わらない。特に戦後の作品は、作品のスケール感も重要なんです。また一人で展覧会を観に行くと、同じ作品を見ている隣の人が何か考えているなとか、一つの作品を共有することで無言のコミュニケーションが生じます。コロナ禍が終わって、それがすごく恋しかったんだなと実感しました。知らない人と何かを共有する空間には独特の空気があるんですよね。

長塚　よくわかります。演劇も同じです。オンラインでの配信が進んだことは、劇場に来られない方のためには非常に意味のあることです。ただ、演劇は演者がその役だと信用してもらうところから始まります。それは演者と観客との契約みたいなもので、同じ空間の舞台の上にいる人がこの人物だと信じた瞬間にマジカルなことが起きる。ドラマや映画とは違い、一つの空間のなかで信じる響き合いが起きて、なおかつ隣の人がゲラゲラ笑ったり、泣いたりする反応まで共有する。生の人間の身体の響き合いがこれだけ大事なんだと強烈にわかりました。

想像力のジャンプがもたらすもの

蔵屋　目の前の人が長塚さんではない誰かだと信じるって、ものすごい想像力のジャンプですよね。それを経験すると、目の前の現実とは別の世界を自分でつくる能力が鍛えられていく。それには人生を変える力があるんです。私、小学校の低学年の頃、ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』を観に連れていってもらって。それが素晴らしくて、買ってもらったパンフレットを10年ぐらいずっと大切に読んでいたんです。

長塚　10年もの間ずっと?

蔵屋　はい、あの世界が忘れられなくて。特に後半、どうしてみんなが家から逃げることになったのかがよくわからず、中学生になっても、長い間それについて考え続けました。ひと頃は熱に侵されたみたいに絵を描いたり、歌を歌ったり。元々本やマンガ、音楽が大好きで、あれこれ想像の世界を育んでいたわけですが、そのなかでも『サウンド・オブ・ミュージック』は大きな体験でした。

長塚　10年というのは相当強烈ですね。蔵屋さんが美術の世界に進んだ原動力は何でしたか。

蔵屋　美術に限らず、違う世界を体験すること、違う世界を自らの手で生みだすこと、これが私の人生にとって常に関心事でした。マンガ、音楽、本。『サウンド・オブ・ミュージック』や映画もそう。自分でマンガも描いていて、2年前にはZINEでデビューをしました。美術はそのうちの一つです。自分で世界をつくりだす、また人がつくったものを見て、衝撃を受けていっぱい得た栄養を自分でかたちにして外に出す。それなしの生活は今も想像できないくらいです。

長塚　まだまだ可能性は広がっていますね。何年かしたら演劇をやっているかもしれない(笑)。

蔵屋　実は展覧会も、私は入口から出口まで完全に別の世界をつくって、人の心を奪ってやるぞ!というつもりで企画しています。さっき長塚さんがおっしゃった“契約”と同じかと思います。

長塚　ほんと、想像力がバーンと発動するってすごいこと。それは演劇も美術も同じなんですね。

――蔵屋さんから見て、横浜とはどんな場所ですか。

蔵屋　美術館にはもっと小さい市立や町立の美術館もありますが、ここはそことは違うダイナミズムがあります。市とはいえ、377万人の市民がいるので。

長塚　神奈川県民の3分の1近くですから。

蔵屋　しかもおよそ170ヶ国、約12万人の外国籍の方もいる。これだけスケールがあると相手の顔が見えると同時に国際的な視野ももち込める、ちょうどいいバランスです。こういう美術館に呼んでいただいて、すごくラッキーだったと思います。素敵なスポットもいっぱいありますしね。ただ一つだけ変えたいと思うことがあって。横浜にいるとよく、開港は1859年で、それ以前は漁村で何もなかったという言い方がされます。だけど、そうじゃない。縄文時代から大勢の人たちが住んできた土地なんです。そんな「目に見えない」人たちの声もちゃんとすくい上げたいんです。

長塚　今年のKAAT EXHIBITIONに、南条嘉毅さんというアーティストが登場しますが、彼が「ここは縄文から人がいるんですよ」と言っていました。

蔵屋　横浜は諸外国の圧力により幕末に開くことになった、日本の五つの港のうちの一つですよね。で、この間台湾の歴史の本を読んでいたら、台湾でも欧米列強の圧力で五つの港が指定されて開港していたんです。つまり五つの港を開かせるっていうのは欧米が植民地化したい国に対して要求するレギュレーションだったようなんです。それを開港が横浜のプライドみたいに言われると混乱してしまう。もう少し広い視野で見ると、世界史のなかでの立ち位置がわかります。もちろん、開港場としての魅力もありますし、清濁あわせ飲む複雑さこそ横浜の面白さですね。

長塚　今日、リニューアルにおける空間のつくり方やお客さまとの向き合い方、とても参考になる話をたくさん伺えて、僕らもとてもやる気が出ました!

蔵屋　私はKAATで面白い演劇も拝見していますし、あのスペースが大好きです。地方都市では美術館や劇場って城跡の文化公園みたいなところにあることが多くて、アクセスが悪かったりする。その点、KAATも横浜美術館もすごく恵まれた立地です。そんな公共空間同士、手を結んでできることがあるんじゃないかと思います。

長塚　いいですね。ぜひ、何か一緒にできたらうれしいです。

蔵屋美香　Mika Kuraya

千葉県生まれ。千葉大学大学院修了。東京国立近代美術館勤務を経て、2020年より横浜美術館館長。企画した展覧会に、「ぬぐ絵画:日本のヌード1880-1945」(2011-2012、東京国立近代美術館、第24回倫雅美術奨励賞)、「高松次郎ミステリーズ」(2014-2015、同、共同キュレーション)、「没後40年 熊谷守一 生きるよろこび」(2017-2018、同)、「窓展:窓をめぐるアートと建築の旅」(2019-2020、同、共同キュレーション)、「すみっこCRASH☆」(2022、無人島プロダクション)など。第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館(アーティスト:田中功起)キュレーターを務め、特別表彰。横浜トリエンナーレ組織委員会総合ディレクター。

横浜トリエンナーレとは?

2001年に第1回展を開催して以来、横浜市で3年に一度開催する現代アートの祭典。目まぐるしく変化する時代のなかで、アートの社会的な存在意義を多角的な視点で問い直す。2024年の第8回展は「野草:いま、ここで生きてる」をテーマにした国際展と、市内アート拠点にて展開する「アートもりもり!」の2本柱で構成。

第8回 横浜トリエンナーレ

「野草:いま、ここで生きてる」

会期:〜6月9日(日)
開場時間:10:00〜18:00(入場は閉場の30分前まで)
※6月6日(木)〜9日(日)は20:00まで開場
休場日:木曜日(6月6日除く)
開催場所:横浜美術館、旧第一銀行横浜支店、BankART KAIKO、クイーンズスクエア横浜、元町・中華街駅連絡通路

第8回横浜トリエンナーレ展示風景
(会場:横浜美術館)　撮影=冨田了平

横浜美術館
3年間の大規模改修を終えてリニューアルオープン。グランドギャラリーでは、本展示の序章が展開される。

「アートもりもり!」

「BankART Life7『UrbanNesting:再び都市に棲む』」
会期:〜6月9日(日)　開場時間:11:00〜19:00
会場:BankART Station ほか周辺各所

みなとみらい線新高島駅B1Fに位置する「BankART Station」を中心に、みなとみらい21、関内、ヨコハマポートサイドの3エリアに42組の作品を展開する。(2024年2月7日現在)

「黄金町バザール2024−世界のすべてがアートでできているわけではない−」
会期:〜6月9日(日)※会期中に一部展示変更あり　開場時間:11:00〜19:00
会場:京急線日ノ出町駅・黄金町駅間の高架下スタジオ / 周辺のスタジオほか

アートとコミュニティの関係をテーマとし、15回目の本展では黄金町と他都市のアーティストを紹介。また、20年間のまちづくりの軌跡を振り返る。

YOKOHAMA MINATOMIRAI DESIGN & ARTMAP

横浜の臨海都心部で、楽しい一日を過ごしましょう！　このエリアでは横浜美術館・神奈川県民ホール・KAAT神奈川芸術劇場などの文化施設をはじめ、BankART KAIKOや象の鼻カフェなど、たくさんのアートスポットや飲食店、歴史的建造物を、素晴らしい風景とともに楽しめます。マップでは、本紙で掲載してきた長塚芸術監督やKAATスタッフのおすすめスポットをあらためて紹介！　横浜美術館の蔵屋館長、建築家・西田司さんのおすすめスポットも紹介しています。6月9日までは横浜トリエンナーレも開催中。併せてお楽しみください。

QRコードから
MAPにとべます

街やストリートを歩く時間

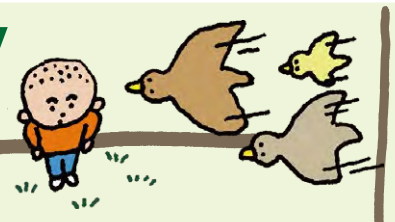
西田司（建築家）

今年の横浜トリエンナーレは街中の文化拠点を歩いて巡るので、横浜美術館、旧第一銀行横浜支店、BankART KAIKOと、点在するトリエンナーレ会場を移動する時間は、横浜の街と海の空気を感じられる。日本丸があったり、汽車道があったりと、建物だけでなく、街の風景から歴史的な匂いを感じるからだ。KAATまで向かう関内エリアは、ストリートから街がつくられてきた歴史がある。海に向かう通り（馬車道、日本大通りなど）は、シンボルロードとして多くの歴史的建造物※1があり、建物が風景をつくり、昔からの名店も多く、多くの人で行き交う。対して、それらをつなぐ横道は、隠れ家的な飲食店やパン屋などが軒を連ね、偶発的な出会いも多く、車が入れないくらいの細い路地もあり、関内のフードカルチャーの現在地を感じられる。路地を歩くと、素敵なお店に加えて、建築的な見どころも多く、日本初の高層純木造耐火建築物※2があったり、防火帯建築と呼ばれる交差点に面した4、5階建ての横浜固有の戦後建築遺産をクリエイターが拠点※3にしていたり、屋上活用としてルーフトップバー※4があったりと、街歩きのおすすめスポットも多い。ぜひ、関内の街に出て、自分のお気に入りの時間を見つけてほしい。

※1 旧川崎銀行横浜支店、THE BAYS、横浜情報文化センター　※2 Port Plus
※3 泰生ビル・泰生ポーチ　※4 The Bar Tenmar

西田司　Osamu Nishida
1976年、神奈川県生まれ。横浜国立大学工学部建築学科卒業後、1999年スピードスタジオ設立。2004年オンデザインパートナーズ設立、代表。東京理科大学准教授、大阪工業大学客員教授。主な受賞歴は、横浜文化賞 文化芸術奨励賞、「ヨコハマアパートメント」でヴェネチアビエンナーレ国際建築展審査員特別賞、日本建築家協会新人賞、「横浜スタジアム『コミュニティボールパーク』化構想」で2017グッドデザイン賞など。

REVIEW



KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『ジャズ大名』

2023年12月9日（土）— 12月24日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

原作：筒井康隆 <『エロチック街道』(新潮文庫)所収>
上演台本：福原充則、山西竜矢
演出：福原充則
音楽：関島岳郎
振付：北尾亘
出演：千葉雄大、藤井隆、大鶴佐助、山根和馬、富田望生、大堀こういち、板橋駿谷、北尾亘、永島敬三、福原冠、今國雅彦、佐久間麻由、ダンテ・カーヴァー、イサナ、モーゼス夢　ほか

音楽することの喜びがジワジワと

文=大谷能生（ミュージシャン）

撮影=引地信彦

会場に入って舞台装置を見て、「これ、どこでミュージシャンは演奏するのかな？」と思っていたら、ずっと舞台上部の一番目立つところに貼り付きで、動きやセリフに合わせてバッチリと、パスタによく絡まるきれいに乳化したソースのように劇中サウンドが鳴らされており、生演奏による音楽劇として最高の出来栄えで感動しました。音響もよく、スタッフさんの苦労が忍ばれます。

役者さんも皆、さまになっている以上の楽器の取り扱いで（特に大鶴佐助さん！）、演奏することの楽しさが物語が進むうちにジワジワ客席に浸透してくる感じがよかったです。でも演奏中とか、床が滑って楽器持ったまま転びそうに見えるんで、古畳でも二、三枚敷いちゃっておけば楽なんじゃない？ と、勝手なことも思いましたが。

演出では、中盤のアメリカ横断がツツイ的にドタバタしており楽しかったです。あのメンツがまた最後に出てきてもよかったかも。主題曲のメロディーが変化するところは笑いました。

ラスト、フリー・スタイルでの狂騒を演出するのはメチャクチャに手間が掛かるわりにはイマイチお客さんを巻き込むところまでいかないことがよくあると思うのですが、あ、もう終わっちゃうかな、と思った瞬間を二、三度超えて祭りが続き、だんだん舞台が大きく見えてきて「もっとやれ～」と思いました。

演奏または歌またはダンスの場面を見せるために「お話が止まってしまう」ことがステージではママあるのですが、ここでの宙吊りは歴史に直結しているので文句ありません。ライブのあとみんなで飲みに行って、行った先にも楽器があったりして、深夜から朝までこんなジャム・セッションになることはホントたまにあるんですよ。筒井さんも経験しただろうそんな夜を思い出しました。

大谷能生　Yoshio Otani
サックス、PC、CDJなどを組み合わせた演奏で多くのバンドやセッションに参加。著書の近作は『〈ツイッター〉にとって美とはなにか』（フィルムアート社）、『20世紀ジャズ名盤100』（イースト・プレス）など。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『SHELL』

2023年11月11日（土）— 11月26日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

作：倉持裕
演出：杉原邦生
音楽：原口沙輔
出演：石井杏奈、秋田汐梨、石川雷蔵、水島麻理奈、成海花音、北川雅、上杉柚葉、キクチカンキ、香月彩里、近藤頌利、笠島智、原扶貴子、岡田義徳　ほか

私というものの不確かな存在

文=尹雄大（作家）

人は少なからず誰かのようになりたい。あるいは誰かの望むようにありたい。私の期待をかなえる相手であってほしいと願う。この願いはいつか潰えるからこそ、その経験が痛みや諦めとともに私らしさを育んでいく。それが現実的な人生だと思っている。

けれども「誰かのようになりたい」ではなく、「誰か」になるし、なってしまう。「そうなりたい」と願うまでもなく誰かになるとしたら。

本作では複数の人間を共有してしまう特異な人たちが描かれている。私の声が誰かの声と重なる。私の顔がぶれて誰かになる。それは固有の人生のなさ、私というものが不確かな存在でしかないようにも見えてしまうため、一瞬拒絶したくなる。

他人と私は絶対的に交わらないはずだ。それが私らしさであり、確かな現実だと信じている。だが、そこに寂しさを感じてもいる。だから私たちは他人と交わりたいと渇望する。そうすれば他人と本当にわかり合えるかもしれないから。

複数の人間を生きるとは、私が輪郭を喪失して流れ、他人を横断していくことになる。確かな交わりを求める立場からすると、常にあなたという手応えをつかめない。本当のことが知り得ないままに突き放された感覚を与えられ、孤独を覚える。

けれども、複数の人間を生きるとは本当は特異なことではなく、誰しもそうではないか。私は私の顔を直接見ることができない。私は昨日の私とは違う。数年で細胞は入れ替わり、別人になっていく。そもそも私は私にとって絶対的に交わってはいないし、確実に誰かになっていく。固有な私が何かわからないままこの世から去っていく。

撮影=引地信彦

なぜ、どのようにして私は生きているのか。この生きている間に答えが得られそうもないが、応えていくしかない問いが私のなかに流れ込んできた。そうしてこの問いとともに、私もまた別の私として今日も生きていく。

尹雄大　Yoon WoongDae
インタビュアー、作家。テレビ制作会社勤務を経てライターになる。主な著書に『つながり過ぎないでいい』『さよなら、男社会』（ともに亜紀書房）、『異聞風土記』（晶文社）など。身体や言葉の関わりに興味を持っており、その一環としてインタビューセッションを行っている。

〔第8回〕

神奈川へ、会いに

〈一般社団法人横浜みなとみらい21〉

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。第8回は、みなとみらいのエリアマネジメントを担う〈一般社団法人横浜みなとみらい21〉の理事長・坂和伸賢さんを訪ねました。

長塚　現在、エリアマネジメントではどんな取り組みを行っているんですか。

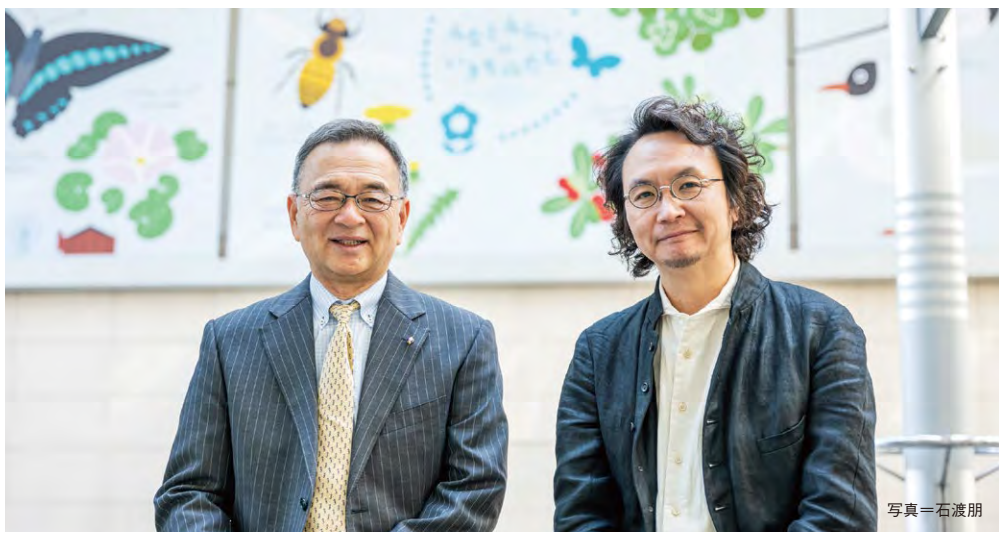
坂和　まちづくりの基本協定の運営、防災訓練の実施、脱炭素先行地域として企業と協働で環境への取り組みを行ったり、みなとみらい大盆踊り、ミュージックポートヨコハマなどイベントの開催や文化プロモーションなど、さまざまなことを行っています。

長塚　みなとみらいの開発はもう完了しているんですか。

坂和　1983年に着工してから40年経ちまして、現在は96%、ほぼ完成しています。

長塚　いつ頃からみなとみらいのまちづくりに携わっていらっしゃるんですか。

坂和　1982年に横浜市役所に入庁し、30年ほど前にみなとみらい21計画係長に着任、その後、都心部整備部長、建築局長、技監を務め、現在に至ります。考えてみれば、だいぶ長い間、関わっていることになりますね。



写真＝石渡朋

長塚　長年、みなとみらいの発展に取り組んでこられて、一番うれしかったことは?

坂和　いくつかあります。一つめは、1993年の横浜ランドマークタワーの竣工です。みなとみらいのマスタープランは壮大なもので、途中でバブル崩壊もあり、本当に実現できるのかとみんなが懐疑的になっていた頃、横浜ランドマークタワーが完成しました。うれしかったですよ。これで、完成を確信することができたんです。二つめは、リーマンショック後のことです。横浜中心部のビルに空室が増えてしまい、関内を中心に小規模のイノベーターを誘致して人材育成に注力しました。みなとみらいも企業誘致が進まず、タワーマンション街に転換すべきだという議論もありました。しかし、横浜の未来を考えて踏ん張ったことで、現在、関内はイノベーターの街に、みなとみらいは企業や研究所、大学、商業施設が立ち並ぶ多彩な街になりました。あの時の選択はまちがいではなかったと日々、喜びを噛み締めています。

長塚　僕はKAATの芸術監督に就任して３年目なのですが、任期中に神奈川県の皆さんに長く愛される劇場にするためにどう設計していけばいいのか、いつも悩んでしまうんです。「KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト」やさまざまな試みをしているのですが、目標に達するまでにはどうしても時間がかかってしまう。でも、お話を聞いていると、時間をかけたほうが豊かに変化していくのかもしれませんね。

坂和　我々も小学生に向けてマップを製作し配布をしたり、みなとみらい地区にある企業や音楽ホール、美術館、博物館などの横のつながりをつくったりと、地道に活動しています。これが花開くのは10年後かもしれませんし、街特有の文化にまで昇華されるのはもっと先かもしれません。でも、大切なことだと考えています。

長塚　そうですね。我々も時間をかけて地道に演劇の魅力を伝えていかないと。今回、お話を伺って、僕らも力が湧いてきました。ありがとうございました。

横浜国際舞台芸術ミーティング 2023（YPAM2023）

＜YPAM連携プログラム＞ イタリア コンテンポラリーダンスショーケース

2023年12月14日（木）— 12月17日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

強さと多様性のイタリアのダンス

文=乗越たかお（作家・ヤサぐれ舞踊評論家）

撮影=前澤秀登

2012年にはイタリア全土の才能を集積し世界に強くアピールするニュー・イタリアン・ダンス・プラットフォーム（NID）も始まり、注目を集めているイタリアのコンテンポラリー・ダンス。2019年には筆者もレッジョ・エミリアで開催されたNIDに参加し、その多様性とレベルの高さに驚かされた。

今回の「＜YPAM連携プログラム＞イタリア コンテンポラリーダンスショーケース」では、イタリアを代表する4作品が上演された。

ルナ・チェネレ『KOKORO』は、日本語の「心」がテーマ。冒頭は、ほぼ裸で首を中に折り肩で倒立していた。この異形の身体から、最後には白く浮かび上がった腕が、無垢な心のようにゆらゆらと羽ばたいていった。

ヤコポ・イェンナ『SOME CHOREOGRAPHIES』では、大きなスクリーンにバレエからエンタテインメントまで古今東西の踊る映像が次々に流れる。ダンサーはその前でゆるく動きをトレースする。後半はほぼ動かず、音楽に合わせた月や雲といった自然の映像が「踊っている姿」として提示された。「何かを動かす行為はすべて振り付け」というコンセプトを、人為と自然で見せたかたちだ。

デューイ・デル『I' LL DO, I' LL DO, I' LL DO』は、床に黒い布で魔法陣のような円が形づくられ、その中央で男が蠢く。そして最後には、まわりの布が動き出し、心細げな男を呑み込むという衝撃のラストだった。

今回最も関心を引かれたのはニコラ・ガッリの『IL MONDO ALTROVE』だった（写真）。タイトルの「別の世界」という意味どおり、独自の世界観を強烈に描ききった。上裸の男女や青い肩掛けの女性たちが奇怪な面をつけて舞台に立ち、粛々と繊細な動きで世界を紡いでいく。薄衣に描かれた日本の能楽の「影向の松（神仏が現れる依代となる）」も効果的に使われていた。

いずれも明確なコンセプトと強い身体性に満ちた4作品である。多様性豊かなイタリアのダンスをこれからも注目していきたい。

乗越たかお　Takao Norikoshi
作家・ヤサぐれ舞踊評論家。JAPAN DANCE PLUG代表。現在は国内外の劇場・財団・フェスティバルのアドバイザー、審査員など活躍の幅は広い。著書に『ダンス・バイブル』『コンテンポラリー・ダンス徹底ガイドHYPER』『実例解説！コンテンポラリー・ダンス入門』等多数。

KAAT×東京デスロック×第12言語演劇スタジオ

『外地の三人姉妹』

2023年11月29日（水）— 12月10日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈大スタジオ〉

原作：アントン・チェーホフ『三人姉妹』
翻案・脚本：ソン・ギウン
演出：多田淳之介
翻訳：石川樹里
出演：伊東沙保、李そじん、亀島一徳、原田つむぎ、アン・タジョン、夏目慎也、佐藤誓、大竹直、田中佑弥、波佐谷聡、松﨑義邦、イ・ソンウォン、佐山和泉、鄭亜美

「外地」呼ばわりする日本人たち

文= 伊達なつめ（演劇ジャーナリスト）

『かもめ』の舞台をロシアから日本の植民地時代の朝鮮に移した『가모메 カルメギ』に続く、ソン・ギウン（翻案・脚本）と多田淳之介（演出）コンビによるチェーホフ翻案第二弾（翻訳／石川樹里）。コロナ禍での初演から3年を経て、日本人の加害者しぐさが、よりズキズキと突き刺さる再演だった。

三人の姉妹は、日本軍の将校だった亡父の駐屯地である朝鮮半島北部で、故郷・東京を理想化しながら暮らしている。周囲の多くの日本人たちも、程度の差こそあれ、統治者側の上位者意識を抱えて朝鮮の人たちに接している様子が、言動の端々からにじみ出ている。唯一、朝鮮人の父と日本人の母の間に生まれ、後に創氏改名を選択する朴智泰（原作ではドイツ・ルーツを持つトゥーゼンバフ／田中佑弥）だけがそのことに自覚的で、言語間差別を排した中立公平のエスペラント語に理想を見出す姿に、自身のアイデンティティーについて悩み抜いた痕跡が窺える。智泰は結婚を約束した尚子（原作のイリーナ／原田つむぎ）に、彼女と学んだエスペラント語でこう語りかける。

「昨日を、僕は忘れました。明日を、僕は夢見ていません。今日を、僕は生きていきます、君と一緒に……（後略）」

現実と折り合いをつけるために彼が絞り出した切ない決意に、胸が締めつけられた。ところが尚子は、「ごめんなさい。エスペラントは全部忘れちゃった」といとも無慈悲に、しかし本人としては、たぶんまったく悪気なく答えるのだ。血の気が引くような絶望感に襲われ、日本人たちが去ったあと、粛々と自分たちの日常を回復してゆく人々の姿を呆然と見守るしかなかった。そして、この舞台は「外地」呼ばわりされる地の本来の居住者の立場から見た、辛辣リアルな、占領者たちの点描集なのだと理解した。

撮影=宮川舞子

伊達なつめ　Natsume Date
演劇ジャーナリスト。演劇、ダンス、ミュージカルなど、国内外のあらゆるパフォーミングアーツを取材し、多数の雑誌・ウェブメディアに寄稿。

ただいま、KAAT準備中

2024年度のラインアップ発表会を開催しました！

2024年2月14日（水）、KAAT神奈川芸術劇場で、2024年度のラインアップ発表会を開催しました。会場は、直前までKAATカナガワ・ツアー・プロジェクト　第二弾『箱根山の美女と野獣』『三浦半島の人魚姫』が上演されていた、KAATの中スタジオ。劇場の臨場感を残した会場で、芸術監督の長塚圭史より、あらためてKAATについて、2023年度の振り返り、そして2024年度のメインシーズンのタイトル「某～なにがし～」と年間プログラムの概要を発表いたしました。演劇・ダンス・美術など、多彩なジャンルの作品をラインアップしておりますので、ご期待ください。

撮影＝加藤甫

日英共同制作　KAAT × Vanishing Point

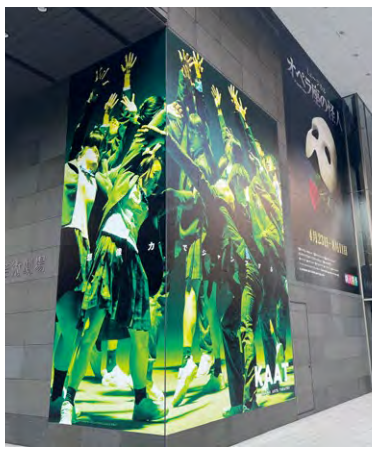
『品川猿の告白 Confessions of a Shinagawa Monkey』に向けたクリエーション

2024年2月から3月にかけて、今秋上演される『品川猿の告白 Confessions of a Shinagawa Monkey』に向けたクリエーションがKAAT神奈川芸術劇場にて行われました。この作品は、村上春樹の小説を原作に、KAATの「カイハツ」の一環としてスタートした日英の国際共同制作プロジェクトです。2022年5月（於：KAAT）、2023年6月（於：Tramway、グラスゴー）に続いて、3回目のクリエーション。マシュー・レントン氏をはじめとするVanishing Pointのメンバーを中心に、日英の俳優やスタッフが、連日稽古とミーティングを繰り返し、公演に向けた準備を重ねました。今秋の公演にご期待ください。

左：マシュー・レントン（Vanishing Point）
右：長塚圭史（KAAT神奈川芸術劇場芸術監督）

外壁のリニューアル

3月4日（月）に「想像力でジャンプする」をテーマに、新しい季節に向けてKAATの外壁の模様替えをしました。写真家・細野晋司さん撮影の迫力ある舞台写真が、皆さんをお迎えいたします。観劇の前後や、近隣へいらした時に、せひご覧ください！


2023年上演『SHELL』舞台写真

ポスターパネルが新しくなりました！

KAAT2階のチケットかながわのカウンター横に迫力のあるポスターパネルが登場しました。KAATの広報誌やチラシなどもご用意しておりますので、ぜひお立ち寄りください。

主催公演

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『ライカムで待っとく』

5月24日(金)ー6月2日(日) 中スタジオ

作:兼島拓也　演出:田中麻衣子
出演:中山祐一朗、前田一世、佐久本宝、蔵下穂波、小川ゲン、神田青、魏涼子、あめくみちこ
チケット発売中

誰も読もうとしなかった、読まれなかった沖縄(こっちがわ)の物語は、沖縄の人々から我々が鋭く問われている、“今を生きる私たち”の物語。2022年の話題作が、待望の再演!

KAAT人材育成プログラム

「グリーンシアター・ワークショップ〜持続可能な舞台芸術を目指して」

6月10日(月) 中スタジオ

KAATでは2023年3月に「劇場がサステナビリティを考える」と題した講座を開催。イギリスで活用されている環境配慮のためのガイドライン「シアター・グリーン・ブック」を学ぶ場を開いた。これに続いて開催する本ワークショップでは、事例の紹介、グループワークなどを行い、参加者の理解を深め、実践につなげることを目指す。

KAATキッズ・プログラム2024

『ペック』from スコットランド

7月6日(土)ー7月7日(日) 大スタジオ

おすすめの年齢 3歳〜6歳 / 上演時間40分(予定)

作:アンディ・マンリー、イアン・キャメロン、ショナ・レッペ
出演:アンディ・マンリー
5/11(土)ー般発売　5/9(木)KAme(かながわメンバーズ)先行発売

鳥のさえずりや歌をモチーフに、“鳥たちの歌声”にさそわれて、見て、聞いて、楽しむ、こどもとおとなのためのノンバーバルパフォーマンス!

『らんぼうものめ』

7月20日(土)ー7月28日(日) 大スタジオ

おすすめの年齢 6歳〜 / 上演時間60〜85分(予定)

作・演出:加藤拓也
出演:鞘師里保、安藤聖、金子岳憲、近藤隼、秋元龍太朗、中山求一郎、高田静流
5/11(土)ー般発売　5/9(木)KAme(かながわメンバーズ)先行発売

この夏はKAATで、一緒に冒険に出かけよう!　気鋭の劇作家・演出家 加藤拓也が描く、神さまたちの世界に迷い込んだ少年の、ちょっと怖くて不思議な物語。

〈チケット取り扱い・お問い合わせ〉　チケットかながわ　0570-015-415(10:00 〜 18:00/年末年始を除く)

提携公演

- CCCreation 舞台『白蟻』
- KUNIO16『ゴドーを待ちながら』
- TAK in KAAT　劇団横濱にゅうくりあ創立40周年記念公演『マリア・ルーズ号の夏』

この夏、「KAATマルシェ」を開催します!

KAAT PAPER 2023年冬号に登場していただいたTSUBAKI食堂の椿直樹さんとKAATにより、この夏初めてのKAATマルシェが開催されます。イベントに先駆け、椿さんからのコメントをお届けします。

「横浜を地産地消の代表都市にする」という、私個人の長年の目標を実現するために「横浜らしさ」とは何か? をずっと探し続けてきました。それには「アート」や「芸術」との連携が欠かせないことに気づきました。これから始まるKAATマルシェは、正に「横浜の食文化」を創造する最初の重要な取り組みです。「横浜ならでは」の新たな文化の始まりにご期待ください!

椿直樹(TSUBAKI食堂)

KAATマルシェ アトリウム
7月6日(土)11:00〜18:00
7月7日(日)11:00〜17:00(予定)

KAAT 公演スケジュール 2024 SPRING-SUMMER

3月12日(火)ー6月15日(土)	KAATアトリウム映像プロジェクト	アトリウム
4月23日(火)ー8月11日(日・祝)	劇団四季 ミュージカル『オペラ座の怪人』	ホール
5月10日(金)ー5月19日(日)	Spacenoid Company Stage Reading『A Bright New Boise』	大スタジオ
5月24日(金)ー6月2日(日)	KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『ライカムで待っとく』	中スタジオ
6月6日(木)ー6月9日(日)	CCCreation 舞台『白蟻』	大スタジオ
6月10日(月)	KAAT人材育成プログラム「グリーンシアター・ワークショップ〜持続可能な舞台芸術を目指して」	中スタジオ
6月15日(土)ー6月16日(日)	エルスール財団『タンゴ探しの旅〜二つの川を渡って〜』	大スタジオ
6月22日(土)ー6月30日(日)	KUNIO16『ゴドーを待ちながら』	中スタジオ
7月6日(土)ー7月7日(日)	KAATマルシェ	アトリウム
7月6日(土)ー7月7日(日)	KAATキッズ・プログラム2024『ペック』from スコットランド	大スタジオ
7月9日(火)	舞台技術講座2024「実現するちから」を学ぶ 〜舞台映像編〜	大スタジオ
7月20日(土)ー7月28日(日)	KAATキッズ・プログラム2024『らんぼうものめ』	大スタジオ
8月4日(日)	KAATフレンドシッププログラム「みんなのKAATバックステージツアー for KIDS 夏休み特別版」	大スタジオ
8月10日(土)ー8月11日(日・祝)	TAK in KAAT 劇団横濱にゅうくりあ創立40周年記念公演『マリア・ルーズ号の夏』	大スタジオ
都度開催(日程は決定次第発表します)	KAATフレンドシッププログラム「みんなのKAAT バックステージツアー」	ホール

※情報は2024年5月1日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
https://www.kaat.jp

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分!
  日本大通り駅から徒歩5分。元町・中華街駅から徒歩8分。
- JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
- 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。
  横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)
  桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)
  ※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。
  ただし、148系統急行線を除く。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用ください。

指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団

YouTube @kaatjpchannel　公式X @kaatjp　Facebook @kaatkanagawa　Instagram @kaatkanagawa

KAAT PAPER 読者アンケート

今後の誌面づくりに活かすため、皆さまのご意見・ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回答いただいた方のなかから抽選で3名様にKAATオリジナルグッズをプレゼントいたします。

※プレゼント応募期限:2024年8月31日(土) ※厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメールでのご連絡をもって代えさせていただきます。

季刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 春号(年3回発行) 2024年5月17日発行　発行=KAAT神奈川芸術劇場　編集=伊藤総研株式会社、松田美保　編集協力=株式会社ボイズ　クリエイティブディレクション=高田唯(Allright)　アートディレクション・デザイン=齋藤拓実(rough)　デザインコーディネート=高田舞(Allright)　イラストレーション=ひだかもと　表紙写真=木川宗一郎